

(資料 1)

崇覚寺本堂 (そうがくじほんどう)

員数：1件

所在地：名古屋市中区橋町2丁目601

所有者：宗教法人崇覚寺

1 登録理由

崇覚寺本堂

名古屋市街に所在する浄土真宗寺院の本堂で、小組格天井を全面に張るなど闊達な造形に、棟梁8代伊藤平左衛門の特徴を示す。

(登録基準：造形の規範となっているもの)

2 概要

本堂

木造平屋建、瓦葺、建築面積 323 m²、建設年代 慶応2年(1866)

崇覚寺は東西本願寺が慶長7年(1602)分立した後、東本願寺末として長島中川村(現三重県桑名市長島町)に、水谷左衛門大夫可高(後の安養坊敬円)の子、右衛門重直によって創立されたと伝えられ、寛永2年(1625)に長島より名古屋市西区堀詰町に移転し、四世永伝・五世宗故の代には名古屋別院建立の中心的役割を担ったという。元禄3年(1690)一如上人(東本願寺十六代)によって別院が創立され、これに伴い、正徳3年(1713)に東別院に隣接する現在の地に崇覚寺も寺基を移した。現在の本堂は、十世秀曜・十一世可定の代に再建されたもので、尾張の名工として知られる伊藤平左衛門(八世守富)が棟梁を務めた。

本堂は、境内の北側中央に南面して建っている。外陣¹・矢来内²・内陣³・東西余間⁴・御簾の間・飛檐の間⁵・後堂⁶より構成される比較的規模の大きな真宗本堂であるが、外陣内には柱を立てず、外陣を三分する柱筋は設けていない。矢来内側面の納まりは構造的にも特異で、棟梁伊藤平左衛門の手腕が窺われる。

崇覚寺本堂は、古式手法を遵守したと考えられる点も見受けられるが、近世末期に相応しい意匠や技法も随所に採用されている。尾張を代表する名工であった伊藤平左衛門守富の作品としても価値は高く、名古屋市内では数少ない近世真宗本堂の遺構でもある。

1 外陣：神社本殿や仏寺本堂の、内陣の外側で参拝の場所。

2 矢来内：参拝の場である外陣と内陣を分ける段差や柵。

3 内陣：神社本殿や仏寺本堂の、神体または本尊を安置した場所。仏寺本堂の場合、堂内を奥の内陣と手前の外陣とに分けている。

4 東西余間：本尊の両脇にある間。

5 飛檐の間：内陣の余間の一つで、左側に位置する。御簾の間は内陣の右側に位置する。

6 後堂：本尊(仏壇)がある内陣の後方の間。



本堂正面 南西 外観全景（名古屋市教委提供）



外陣内観 矢来内・内陣・余間正面（名古屋市教委提供）